

円地文子

古典の旅

円地文子紀行文集 第二卷



平凡社

古典の旅 円地文子紀行文集 第二巻

発行日 一九八四年七月十三日 初版第一刷

著者 円地文子

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五

郵便番号 一〇二

電話 東京(〇三)二六五—〇四五—

振替 東京八—二九六三九

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社石津製本所

© 円地文子 1984 Printed in Japan
不良本のお取替えは直接読者サービス係までお送り
下さい(送料は小社負担)

定価 一六〇〇円

田
地
文
子

古
典
の
旅

田
地
文
子
紀
行
文
集
第
二
卷

目
次

源氏物語紀行 その一

源氏物語と京都 8

京都御所所見 13

嵯峨野、宇治ほか 26

越前武生 52

源氏物語紀行 その二

嵯峨あたり 62

光源氏のモデル 67

『源氏物語』の野宮 72

長谷寺の牡丹 77

住吉詣で 81

住吉と遊女 87

京都の旅

大原と花の寺 94

北野詣で 106

桂離宮と大仏殿

113

近江から大和、紀州へ

雪の関ヶ原

122

竹生島の桃山美術

126

女人高野

133

高野山に登るの記

146

美について

浄瑠璃寺の吉祥天女

160

沈んだ美の美しさ 玉蟲厨子

162

私の好きな国宝

163

山陽から四国へ

瀬戸内の寺

176

讃岐から阿波へ

183

鞆の浦晩春

197

みちのくへ

松島

208

中尊寺

212

北上川

215

梅雨時の旅

218

鳳凰堂と金色堂

221

『源氏物語』の女君を語る（抄） 古典の旅・付

229

装画・磯谷時子

写真・矢野建彦

（しやくなげ／ききょう）

まえがき

この集の内容は、古典、ことに『源氏物語』を中心にした旅の話が多い。『源氏』を中心にしていると、当然、時代は王朝で、所は京都が多くなり、前にも述べたように、旅は好きなので、好きな古典関係で、京都や奈良近くを歩くのはまことに楽しい。

ほかに、『伊勢物語』や『平家物語』についての雑筆も交っている。

一九八四年初夏

円地文子

源氏物語紀行

その一

源氏物語と京都

私は病気になったときなど、少し気分がよくなると、枕許に置いた好きな本を氣持の赴くままに、くり返して読むことがある。そういう類いの書物のなかで随一のものが『源氏物語』であった。

幸か不幸か、私の生れ育った家には、本がいっぱいあった。とりわけ、手ごろで読みやすかったのは大正初期に刊行された有朋堂文庫である。そのお蔭で日本の古典と馴染みになったのは、八、九歳の頃からであったろうか。今でも、旅行に出かけるときなどには、按摩でもとるかわりに二、三冊の有朋堂文庫を持って行くことがある。

また、私は仕事の疲れを癒そうと思うときには、よく京都へ出かけて行く。年に五、六回は訪れている。私には道楽というほどのものがないし、お酒も煙草もたしなまないし、勝負ごととするわけではない。私に興味らしいものがあるとすれば、旅行だけかも知れな

い。旅行好きだった父や、とくに京都が好きだった母に、子供の頃から京都へ連れて行かれたことから、そのような旅行の趣味がいつしか身についてきたのだろう。

その京都は言うまでもなく、『源氏物語』のふるさとである。京都御所をはじめ、嵯峨野、大原野、叡山、宇治など、『源氏物語』ゆかりの地は何度もめぐりあるいているが、私はこの古都の人間化され風化された自然の趣きに魅^ひかれるようになった。一木一草にも人の手が加わっていて、程よく建物と調和した自然がそこにある。町中や野や山に点在する神社仏閣のたたずまいはもちろんのこと、さりげない路地の中の風景に何とも言えない雅^{みや}びが漂っているかと思えば、のどかな農家の野菜売りや、^{かまち}框に並べられた大根が秋の日を浴びている風景などにひなびた味わいが残されている。若い頃には自然の美しさは比較的理解されても、人工的な庭園とか建築の美しさには殆ど無関心であった。この頃でも、別にそれらに理解が深くなったというのでもないのに、自然の間に^は嵌め込んだ人工の美しさに、何とも言えず懐かしい新しさを感じて心ゆくようになった。

こうして、京都の自然と、『源氏物語』の世界とは私の心のなかでしっくりと溶け合っ

て、どこまでが現実か虚構か分ちがたい錯覚にとらわれることもあった。

『源氏物語』については、ディレッタントとしてかなり自信のあった私が、それを現代語

に移す仕事にとりかかったのは昭和四十二年七月のことである。

私はのんきに考えて二年ぐらいで出来るでしょうなどと言った。しかし、これはとんでもない誤算であった。

本式に訳し出してから、満五年が経って、やっとその訳本の第一巻を送り出す運びに漕ぎつけた。初め、現代語のスタイルをきめるために、「桐壺」の半分ほどを三つぐらいの文体でノートに書いてみた。原文につきすぎると読みづらいものになるし、敬語を除いて訳してみると筋だけを通してのように味気なくなる。結局、専門家からは文句がつくだろうし、初めて読む人には敬語が煩わしいと思われるかも知れないが、本文の中の敬語をできるだけ節約して、一応、現代人が読んでも、それほど気にならないようにしようと考えをきめた。

病気になるったときに気持の赴くまま『源氏物語』を読み返したのは、むろん、新しいことを知ろうとしたわけではないのは確かだった。そのくせ、何度読み直してみても飽きるということはないし、読んでいるうちに必ず何か新しい発見をするという経験があった。そして、口語訳については、本文の一句一句を正確に解説した上で自分流の意訳も加筆もしてみようというつもりだったが、読み直してゆくうちにあらためて気のつくことや解釈

を深めた部分も多かった。古典とは、いったん死に絶えたかにみえても、必ず、常に生き返ってくるものだとしみじみ思わずにはいられなかった。それは、『源氏物語』がこれまでの時代々々の烈しい変貌に耐えて、逆にその変貌のなかから新しい血を吸い上げ、若返ってゆく不死鳥であるという感慨であった。

幸い、口語訳の仕事をしている間にいやでたまらなかったことは一度もなかった。そんなに好きな『源氏物語』だから、私のような怠けものが飽きもしないで何とか五十四帖を訳し通せたのだろうと思う。

ただ、訳業のさなかの昭和四十四年一月、右の眼が網膜剝離にかかって手術したことは、今なお忘れ切れない出来事であった。失明の怖れと闘いながら、三ヵ月以上、ペンを持つことが出来なかった。以前には病気のときといえど本を読むことが楽しみであったのに、眼を患ってはその慰めも奪われてしまった。この失われてゆく視力では、京都の旅の愉しみも今後は覚束ないことになるだろう。当然、絶望感に襲われたはずであるのに、不思議なことにもう駄目だとは思えなかった。真暗な視界を切りひらくように前を見ていられたのは、『源氏物語』を灯にしていたのかも知れない。これがもし『源氏物語』の訳でなかったならば、私は途中で倒れていただろう。

口語訳に手を染めた当時から、十余年が経つ。訳本も無事に世の中へ送り出すことができたし、曲りなりにも視力を恢復して読書ができるようになった。当時をふりかえると、晩年の光源氏が洩^もらした「さかさまに行かぬ年月よ」という述懐が、あらためてしみじみと思ひおこされてくる。

京都御所所見

去年の十二月初め、徳島に講演に行った帰りに京都に立寄った。かねて、お願いしてあった京都御所を参観するためであった。

私はここ六年ばかりの間に、三、四度、京都御所に来てゐる。最初は『源氏物語』を訳しだした頃で、紫宸殿、清涼殿をはじめ仙洞御所までかなり精しく見てまわった。

勿論、現在の殿舎はすべて、徳川末期（安政）の造営によるものであるが、様式はほぼ王朝以来の寝殿造りを模しているので、『源氏物語』の口語訳に当る私としては、具体的なイメージを捉える一助にしたかったのである。

その時、一番感銘の深かったのは、清涼殿の正面に向つて、右手にある弘徽殿（こうきでん）の上の御局（ごきよ）、藤壺（ふじろ）の上の御局（ごきよ）の二つの部屋であった。今度見た時には、内部も綺麗に整頓され、御簾（すだれ）なども新しく、すべて明るい感じに見えたが、六年前には最高后妃の詰所であるこの二

つの居間が予期していたより、遙かに暗く、重苦しい印象を受けた。

藤壺はともあれ「弘徽殿の上の御局」という言葉は『源氏物語』よりも『枕草子』で私はこの上なく明るく美しいところとして印象づけられている。

一条天皇の最初の中宮（後に皇后）定子が、まだ父の道隆が関白として栄えている時代、後宮の女王として、伊周、隆家など兄弟の貴公子に取りまかれている様子を、侍女の清少納言が、煥發する才気を奔放に駆使して讃めたとえるという文章には、「弘徽殿の上の御局におはします頃」という書出しの件がいくつもある。『枕草子』特有の感覚の鋭い清新な筆致からは、いかにも、当時の弘徽殿の上の御局が明るい春の陽に照らされているような清明な印象を与えられる。そこに登場する一条天皇や中宮定子をはじめ、大納言伊周、中納言隆家などの秀才貴公子は、いずれも鮮明な明暗に照明されていて、陰鬱に淀んだ影はどこにも見られないのである。

その印象があるので、私は『源氏物語』の中の後宮の暗闘を読んでも、殿舎について暗い感じを持つことがなかったのであるが、その時、清涼殿の上の御局を実際に見て、格子の太さや御簾竹の黄ばんだ重苦しさに、はじめて、一人の天皇に侍して後宮に住む多くの宮嬪達の陰に籠った嘆きの声をきく思いがした。『源氏物語』の第一巻「桐壺」の冒